

サビエル生誕五百年



「出会い」という神秘

「サビエル展を開催して②」

生きていく中で、誰もが多くの人に出会う。その出会いは偶然であることが多い。しかしその偶然の出会いが人生に大きな影響を受けることがある。

たとえば結婚だ。異なった環境で育った二人が一つの出会いによって何十年という生涯をともしにする。私の場合は職場で知り合っ

て、結婚し、間もなく五年を迎える。もし彼女が同じ会社に就職しなかったら出会うことはなかったであろう。その偶然の出会いが、今では自分の人生で欠くことのできない伴侶なのだ。まさに「出会いの神秘」である。ある人はそれを「神の恵み」という。日本にキリスト教を

伝えたフランシスコ・サビエルは最初から神の道を歩んでいただけではない。一人の人物との出会いが彼を「東洋の使徒」とまで呼ばれる人に変えたのである。

北スペイン・バスク地方の敬虔（けいけん）なクリスチャンの家庭に生まれたサビエルは十九歳の時、パリのソルボンヌ大学に留学。学士の称号を取って立身出世し、前途洋々たる人生を歩もう

としていた。ところが、大学の寮で偶然、イグナチオ・ロヨラに出会った。ロヨラは自分の信仰体験から「霊操」と呼ばれる祈り方を体得、のちにサビエルらと「イエズス会」という修道会を創立する。

ロヨラも今のスペイン北部のバスク地方の出身だが、サビエル家は同地方のナバラ王国の貴族で、バスク独立

派であったのに対し、ロヨラ家はスペイン王国側の貴族で、ロヨラ自身、騎士としてナバラ王国と戦い、右足を負傷した。

双方の戦いはスペイン側が勝利し、今もバスク独立運動はあるものの、バスク地方はスペインの一部となっている。サビエルはロヨラが歴史的に敵対関係にあったこともあり「何か虫の好かないや

で感動し、騎士として生きるのではなく、神とともに生きることを決意。エルサレムに巡礼に行く途中、マンレサという洞窟で神体験をし、それを「霊操」という祈りの本にまとめて霊的指導をしていた。

ロヨラはこの世の立身出世を夢見るサビエルに対し、イエスの言葉「人は全世界を手に入れても、その魂を失

つ」と思っていたという。一方、サビエルより十五歳も年上のロヨラは戦争で負傷し、故郷ロヨラ城で静養中「イエズス伝」「聖徒伝」などを読んで

「この二人の出会いを考える時、私は出会いをただ偶然と考え、成り行きにまかせていたことに気づく。確かに出会いは偶然かもしれないが、その出会いを

大切にし、双方で育むことを忘れていたように思わざるを得ない。ロヨラとサビエルの出会いを特別視するのではなく、自分の日常生活の中の小さな出会い…夫婦、親子、隣人、偶然に会った人との出会いを識別し、一つ一つの出会いを良いものに育てる努力をしなくてはならないと、サビエル展で感じたのである。

世界地図を右手に遠く海のかなたに目を向ける サビエル(展示物から)



サビエルが人生の師と仰いだ

イグナチオ・ロヨラ